

V 塩嶺トンネル周辺現存植生図

現在建設中の塩嶺トンネルの岡谷～塩尻間中約2 km、長さ10 kmの範囲において、植物社会学的な現存植生図が作製された。現存植生図の縮尺は1/5,000である。凡例は、現地の植生調査およびテーブル作業によって抽出された植生単位を中心に、17の凡例に分類し、さらに3つのその他の凡例がつけ加えられた。

作製された現存植生図によれば、この地域は、殆んどが多かれ少なかれ人為的な管理下におかれている植生、すなわち、自然植生が伐採、植林、採草、耕作などの主として第一次産業の形態をとった人為的な干渉の結果生じた代償植生でしめられていることがわかる。自然植生はごく限られた場所にみられ、例えばアブラチャン-ケヤキ群集、ネコヤナギ群集、ヨシクラスに所属する湿生草本植物群落のアゼスゲ群集、カサスゲ群集などが、象ヶ調付近、高尾山北部勝弦盆地などに残存している。これらの植物群落はいずれも谷の奥部などの地下水位の高い立地に見られ、植林地や耕作地に不適当な理由から放置残存したものと考えられる。しかし、これらの植生は学術的にきわめて価値が高く、しかも水収支の面からも重要な植物群落と言える。

代償植生域の大部分は、植林地でしめられる。1,000 m内外の山地の尾根部から斜面上部にかけての乾性立地はことごとくアカマツの植林地となり、伐採あと地に植林されたばかりの若齢林から、20 m内外に成林した林分まで様々な生育段階が見られる。一方谷状地は、カラマツの植林地となり、アカマツ植林地よりは湿生な立地に見られる。わが国の海岸ぞいの多雨地方では、アカマツとスギの配分が一般的であるが、降雨量の少ない本地域では、現存植生図に見られるアカマツ、カラマツの配分が特徴的である。スギーヒノキ植林および二次林（コナラ、クヌギ林など）はきわめて少ない。山足部にわずかにスギの植林地が見られる。

カラマツおよびアカマツの植林地は成林すると伐採され、再び植林がくり

返されるが、調査時点において、岡谷市街に面した東斜面や善知鳥峠周辺の西向斜面に比較的大規模な皆伐が行なわれている。

調査地の中央部に位置する勝弦盆地では南面したゆるい斜面の大部分が、畑耕作地や水田耕作地として利用され、安定した土地利用形態を示している。しかしその盆地の東方にあるゴルフ場（信州塩嶺ゴルフ場）はこの地域としては大規模な開放地域となり、外来牧草によって造成された低茎の草原が広がっている。したがって、植林地や農耕地で構成されるこの地域が、異質ながらも不安定な景観域となってしまう。

調査地域内の植生の分布や配分を、水収支の面から考察すると、植林地や二次林のしめる割合が水資源確保の点で問題視されなければならない。従って、伐採に際しては皆伐計画をできるだけさけるような配慮が望ましい。この点においては、現存植生図に見られる一部の皆伐地は、立地保全上からも問題があると言える。

耕作地やゴルフ場などの開放的な植生域は裸出された地表面からの水分蒸発量が多い。また、人為的な地下水のくみ上げや排水工事、道路造成などが、水収支に変化をもたらす危険性がある。斜面における耕作地は等高線栽培によって水の損量を少なくし、エロージョンの防止につとめられる。イネの生育中の水田は、貯水の役割を果す。ゴルフ場の場合は、地表面からの水分蒸発はきわめて高いと考えられ、水収支の点で、もっとも問題のある地域と言える。しかし、地下水の高低差が直接根群の浅いシバ群落の水供給に影響するかどうか、今後の比較植生調査によって明かにされるはずである。